

### 1 自己評価及び外部評価結果

**【事業所概要(事業所記入)】**

事業所番号	0793240011		
法人名	社会福祉法人 おおくま福寿会		
事業所名	グループホーム やすらぎの里		
所在地	福島県双葉郡大熊町大字夫沢字南平152番地の3(原発事故による避難先:福島県会津若松市一貫町松長1丁目17-1松長近隣公園応急仮設住宅敷地内)		
自己評価作成日	平成28年12月27日	評価結果市町村受理日	平成29年3月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/07/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/07/index.php</a>
----------	---

**【評価機関概要(評価機関記入)】**

評価機関名	NPO法人福島県シルバーサービス振興会		
所在地	〒960-8253 福島県福島市泉字堀ノ内15番地の3		
訪問調査日	平成29年2月17日		

**【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】**

原発事故により会津若松市の応急仮設住宅敷地内にて事業を再開している。会津は大熊町と違い雪が多く冬場はほとんど外出が出来ない為、暖かい季節に外出や行事等を増やしている。又、集会所等での地域の人達との交流会等で様々な体験をする事で生活の中に楽しみを多く取り入れている。慣れない土地で時間だけが経過している中、家族と離れて暮らす寂しさや不安な気持ちを受け止め安心して落ち着いた環境作りや言葉かけ等の対応を心掛けている。

**【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】**

1. 震災後、大熊町から会津若松市の仮設事業所で利用者のサービス支援を行っており、避難仮設住宅敷地内の集会所を活用し、同郷の方々と交流したり、ふるさと祭りなどの行事に参加し交流を図っている。また、日常的に散歩や買い物、季節感を味わう為の花見や名所地への外出支援を積極的に取り組んでいる。  
 2. 慣れない土地での生活の中、常に利用者の要望や意向を丁寧に把握し、利用者一人ひとりに寄り添いながら支援している。また、職員も同じ境遇の中で、活き活きとした表情で利用者の支援に当たっており、利用者の表情も明るく、家族の評価も非常に高い。

**V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します**

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	長期の避難生活を強いられた環境の中でも安心して暮らせるよう「職員が代理家族となり家庭的な雰囲気の中入居者に安心と潤いのある共同生活を提供する」又「その人らしい暮らし」の実現と「地域に開かれた施設」「サービスの質の向上」を念頭におき仕事に励んでいる。	開設以来の理念であるが、避難生活を機に職員と話し合いを行い、再確認をして共有を図りながら、長期避難生活を送っている利用者が、安心と潤いのある生活ができるよう支援している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	仮設住宅敷地内・集会所等で行われる慰問等には積極的に出向き、大熊町の方達との再会や交流を楽しんでいる。	仮設住宅での生活者は年々少なくなっているが、同郷の方々と親しく会話ができるよう支援している。また、仮設住宅敷地や集会所で行われる大熊町の「ふるさと祭り」「伝統芸能発表」「大熊町立の小学校の児童の慰問」等には積極的に参加し交流を図っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	同仮設住宅にも一人暮らしの方が多いため、入居者と共に散歩した際等には声を掛け不安に思っていること等は無いか聞き出し随時見守り・対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、事業所の取組内容や具体的な改善課題がある場合にはその課題について話し合い、会議メンバーから率直な意見をもらい、それをサービス向上に活かしている	会議形式と行事参加型で開催し、現状報告・要望・検討項目・アドバイスには随時対応するようにした。	運営推進会議は事業所の抱える課題に関する話し合いや、行事のモニター役になってもらい意見や感想を頂いているが、開催回数が2回と非常に少ない。	運営推進会議を概ね2ヶ月に1回以上開催し、提供しているサービス内容を報告したり、災害時の具体的な支援体制のあり方などについて話し合っ欲しい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議に町職員の福祉課介護保険係が参加されている為、関係の強化はもちろん制度上の重要な情報なども頂いている。又、新規入居希望などの情報交換も行っている。	運営推進会議に町職員が会議メンバーとして参加しており、介護保険上の問題や情報交換などを行って、協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束に関するマニュアルは職員がいつでも見れる所に配置している。日中は玄関・通路の施錠は行わず対応している。	身体拘束廃止マニュアルを整備し、身体拘束の弊害を理解し、「どのような事があっても身体拘束は行わない。」との姿勢で取り組んでいる。日中帯の玄関の施錠は行っていない。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待には身体的虐待だけではなく様々な虐待があることを職員に周知している。暴言・放置等の精神的虐待も決して行っていないと認識し防止している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	これまで制度の利用に至ったケースは無いが、入居検討委員会においては話し合われる機会がある。解らないことに際しては町職員介護保険係担当者から情報等を頂くようにしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族等からの入居相談があった際には入居申し込み方法、入居検討委員会等状況に応じて口頭での説明(電話相談受付可)を行っている。基本的に契約の締結や解約時は管理者が身元引受人等と面談のうえ説明し、合意締結している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常的な不満や要望があれば直ぐに聞けるよう、担当職員が身近な存在として日頃より接している。又、家族等の来所時には個別に管理者・担当職員が対応し、意見や要望などを受付やすいようにしている。	利用者の意見や要望を日常生活の中で把握し、家族からは訪問時や電話などで聴き取り、管理者や職員間で話し合い、運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	原則毎月1回開催の課内会議を行うことにより職員の意見や要望を聞ける場を設けている。又、申し送りノートを活用し記録として残すことで職員全体に周知出来るようにしている。	管理者は、課内会議やミーティングの中で、気軽に話せる雰囲気作りをしたり、日頃から職員に対し声掛けをしている。また、職員の勤務態勢に配慮したり、懇親会を開きながら、働きやすい環境作りに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員のスキルアップ(各種資格取得の為に試験日・講習会等)目的に応じ勤務日を調整(希望公休等)にて調整している。資格取得者(取得資格にもよるが)については給与・身分の昇格等がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各種研修会の案内を回覧したり順次研修会への参加を行っている。又、先輩職員が個々に指導・助言を行い常に教育にあたっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会から様々な情報や研修会の案内を受けている。可能な範囲で参加できるよう心掛けている。		
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	慣れない土地で家族と離れて暮らす不安を受け止め本人納得の上で入居して頂いている。又、家族からの様々な情報をもとに安心できる環境設定と共に寄り添う関係であると認知して頂くよう働きかけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の方も遠方で避難生活をされている方も多い為、入居者・家族への負担を最小限に考慮しながら個々の事情に合わせて柔軟な対応を行い信頼関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居相談があった際は担当ケアマネジャーや町職員等より直接情報を得ることで「その時」の見極めや入居までのスムーズな連携が取れている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の「思い」を理解・共感し個性を引き出すよう努めている。これまで長年行ってきた「暮らし」が継続出来るよう掃除・洗濯・調理等出来るだけ一緒に行うようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族も避難生活の身で県内外で生活されている方も多く、行事参加やお盆・年末年始の帰省などの協力はあまり得られていないが、定期受診は家族に対応して頂き利用料の支払いは面会を兼ねてホームに来て頂いている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	仮設住宅の一角にホームがある為デイサービスや集会所で行われるイベントには積極的に参加している。又、以前からお世話になっていた理容師が同仮設住宅におり、定期的に散髪に来てくれている。日常的に交流が持てるよう努めている。	避難している馴染みの理容師による訪問理容があったり、仮設住宅地内にあるデイサービスや、集会場で行われるイベントに参加し、顔見知りの方々と交流を図っている。また、家族と一緒に墓参りなどに出かけ、馴染みの人や場所との関係が途切れないよう支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	食事の席は入居者同士の相性を考慮し皆が不快感無く、和やかに食事やお茶の時間が過ごせるよう配慮している。又、職員が間に入ることによって入居者間の交流を深めるよう努めている。入居者同士で声掛け合いお互いに頼り合っている様子も見られる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	断ち切らないよう努めている。以前入居されていた方の家族がホームに足を運んでくれることもあり職員もうれしく思うきもちもあった。継続できるよう努力したい。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族から情報を収集したり、職員間で意見交換し本人の言動や行動だけに留まらず総合的に把握するように心掛けている。	日常生活の中で利用者に声掛けをしながら、思いや意向の把握に努めている。また、自分の思いを寄せられない利用者には、家族から情報を得たり、日常の行動や表情などから汲み取っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に家族・担当ケアマネージャーからの聞き取りを行い情報収集に努めている。又、入居者との日々の会話からこれまでの暮らしの把握を常に見出すよう心掛けている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	ケアプランは個別的な対応になっているが食事時間や入浴日は共通の時間になっている。しかし、食事内容は個人の体質・病歴等を考慮し代替食や食べやすい形状・食器類を変更するなどし提供している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	サービス調整会議事前に担当職員によるモニタリングを行い、会議時にケアプランとモニタリングを基にプランの検討や見直しを行っている。又、随時本人・家族の要望を聞き入れながらケアの方向性について話し合っている。	担当職員によるモニタリングを行い、本人や家族の要望を聞き、サービス調整会議の中で、課題等を検討し、ケアに反映させた介護計画を作成している。また、状態が変化した時には、その都度介護計画の見直しを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日勤職員を中心に日々の様子等の記録に努めている。入居者の行動や言動の変化を具体的に記入する他、職員の判断や予測等も記入し全貌を把握できるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	臨機応変に対応出来るよう心掛けている。 例えば入居者の急病時等に病院受診の送迎や同行等にも事業所に対応するよう調整している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	特に家族(親族)の力添えが大きい。入居時から本人と家族等の関係が継続して良好に保てるよう働きかけている。例えば、本人が面会を心待ちにしている様子を伝えたり、季節に応じて暑中見舞い・年賀状を書いて出したりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	定期受診等の病院受診は家族対応で了解を得ている。受診の際には文書で健康状態等の情報を提供している。必要に応じて職員が家族と共に同行している。	本人や家族が希望する医療機関をかかりつけ医としている。受診は、事業所より利用者の健康状態などの情報を得て、家族が同行することになっているが、体調や状態に合わせて、職員も同行している。受診の結果は送迎時に共有している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員は昼夜を通して介護にあたっていることで、入居者の状態変化についての的確に把握し管理者に報告している。管理者が1回/週の訪問看護師へ状況説明・相談し指示を仰ぎ全職員へ伝達し、必要に応じて家族に報告し適切な対応に努めている。又、隣接のデイサービス看護師の協力も得ている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院中は状況確認に病院に行き、本人に面会し看護師との情報交換を行っている。又、家族に連絡を入れ情報を得ている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	ここでの事業は仮設であることを話し、将来的な見通しが立たない状況に理解を得て利用して頂いている。随時今後の対応について個別に家族と話し合い家族に寄り添った支援が出来るように努めている。	仮設の事業所であることから、重度化した場合、事業所に対応できることとできないことを十分に説明しながら、同意を得ている。常に家族と話し合い、思いや意向に沿えるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	訪問看護師との24時間連絡体制が確立されており、事故発生時の連絡体制も確立されている。又、隣接するデイサービスセンターの看護師への協力も求めている。防災委員による応急手当勉強会も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署立ち合い総合防災訓練・夜間想定避難訓練・日中想定避難訓練・震災訓練を随時行っている。又、入居者の生命安全からスプリンクラーの設置を依頼中である。	毎月、火災や地震を想定した避難や消火訓練などを実施している。消防署立ち合いの総合防災訓練も実施し、指導を受けている。仮設事業所の為スプリンクラーが未設置であったが、今春設置されることになった。	
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの人格を尊重し誇りや人格を傷つけない言葉かけやプライバシーを損ねることのない対応を心掛けている。例えば、居室入口暖簾は本人のみの目印としてではなく、他者の目にも触れるようにし他入居者が間違えて入室しないよう配慮している。	日常的に利用者の人格に配慮した、丁寧な声かけに心がけている。また、排泄や入浴時における誘導は、プライバシーや羞恥心に配慮した、言葉かけや対応をしている。呼称についても本人の意向に沿った対応をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の意思を引き出すことが困難な場合もあるが、好みの飲み物・食べ物等を選んでもらう際や活動への参加など自己決定を促す言葉かけに努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	基本的な一日の流れはあるものの、入居者のその時の状況に応じて出来るだけ柔軟に対応している。例えば、起床時・昼寝・就眠の時間は無理に起こしたり横にしたりせず、本人のペースに合わせて対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服装に関しては基本的に本人の自由に任せているが、清潔である事と寒暖の調整に気配りしている。理美容についても、毛染め・シャンプー等本人の希望に添える様に対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事に関連した作業を利用者とともに職員が行い、一緒に食事を味わいながら利用者にとって食事が楽しいものになるような支援を行っている	プランター等で育てた採れたての野菜を使い食卓に出したりした。又、食材の買い出しに同行してもらい食材選びや荷物運び等を手伝ってもらうこともある。又、季節に応じて旬の物を調理し、職員と入居者が同じ食卓で同じ物を会話しながら食すことで楽しさを見出している。	旬の物を多く採り入れ、美味しく楽しく食事ができるよう支援している。食材の買い出しから、テーブル拭きや食器拭きなど、利用者職員と一緒にやっている。また、プランターで育てた採りたての野菜なども、献立に反映させている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事の摂取量・水分量は毎日記録として残し全職員が把握出来るようにしている。又、個々の希望や身体状況に応じて入浴後の水分補給等も行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後歯磨きの声掛け・洗面所への誘導・歯磨きの介助を個人に合わせて行っている。入れ歯洗浄剤も全入居者使用しているが、頻度は個人によって違うためその都度対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の声掛け・確認・誘導等それぞれに合わせた対応で行っている。個人の状況に応じてリハビリパンツ・パットの使用を随時検討・見直しをおこなっている為、紙オムツ・リハビリパンツを常時必要としなくなった成功例が多い。	排泄チェック表からパターンを把握して、トイレ誘導の声掛けを行い、トイレでの排泄にむけた支援を行っている。また、一人ひとりの排泄用品の見直しも行き、リハビリパンツやオムツ等使用軽減につながった利用者も多い。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個人に応じた予防に取り組んでいる	毎日排泄の記録・確認を行い排便コントロールを実施している。出来るだけ下剤等に頼らず、毎日の食事や規則正しい生活習慣によって自然排便を促すよう努めている。個人個人の体力に応じた散歩・体操の実施や水分補給も試みている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	最低週2回の入浴が出来るようにしている。外出・通院などの個別の都合には柔軟に対応・調節している。季節に応じて入浴剤を変更したり一人ひとりがのんびり入浴出来るように心掛けている。夏期週3回・冬期週2回実施。	本人の希望と外出や通院などを考慮しながら、夏期は週3回、冬期は週2回の入浴支援をしている。入浴を拒む利用者に対しては、曜日や時間を変えて、できるだけ入浴して頂くようにしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を促し、生活のリズムを整えるよう努めている。就寝前には冷暖房等により居室の温度調整をしたり個人に合わせて毛布類を使用したりしている。又冬期には週1回布団乾燥機を使用するなどしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬管理は処方箋を家族から預かり、管理者が個人の薬ケースに1週間ずつ分けている。その日の朝・昼・夕・就寝前分を薬ケースに移し、与薬直前にケースから取り出し本人の顔と名前を確認したうえで手渡し服薬を確認。その役割を日勤者とする事で誤薬防止に努めている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活の中でそれぞれの得意分野で力を発揮してもらっている。役割や仕事に対してその都度感謝の言葉を伝えている。(洗濯たみ・食事の後かたづけ・買い出し・テーブル拭き)等様々な役割を持つことで張り合いを持ってもらえるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	季節の変化等を感じてもらえるように外出支援を1ヶ月に1回盛り込んでいる。その際以前法人で働いていた方がボランティアとして参加協力してくれている。	日頃から、事業所周辺の散歩や食材の購入に出かけたり、ボランティアの協力を得ながら、普段行けない莓狩りやひまわり見学などに出かけ、新天地での季節感を味わっている。また、家族と一緒に墓参りなどにも出かけている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人に合わせた所持金の対応をしている。本人の希望があれば金融機関への送迎もしている。又、ホーム前にお店屋さんがある為購入物によっては職員と一緒に行き自分の目で見て購入出来るように努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	状況に応じた対応が出来るように努めている。電話の利用についてはいつでも利用出来るように対応している。家族に暑中見舞い・年賀状等季節に応じて入居者と担当職員の一緒に顔写真を載せ送付したりしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	第一に清潔を心掛けている。季節の花やタペストリー・行事写真・季節に応じた共同作品を飾り季節を演出している。冬場は外出の機会も減ることからストレスを感じないように数種類の観葉植物も配置している。	共用空間には、季節感が味わえるよう、季節の生花や手工芸品、タペストリーや行事写真を飾り付けている。居間にはソファが置かれ、利用者はテレビを見たり、職員や利用者同士が会話をしながら、ゆったり過ごせるよう工夫している。また、仮設建物であることから温度や湿気の管理に特に気を払っている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	仮設な為全体に狭い空間になっているが、職員で話し合い入居者の意見を取り入れながら各々の居場所作りに努めている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室、或いは泊まりの部屋は、プライバシーを大切にし本人や家族と相談しながら、居心地よく、安心して過ごせる環境整備の配慮がされている(グループホームの場合)利用者一人ひとりの居室について、馴染みの物を活かしてその人らしく暮らせる部屋となるよう配慮されている	居室には其々家族の写真や自作の作品を飾ったりしている。又、本人の好みでベッドの位置を変えたりしこだわりの部屋作りを行っている。居室入口には好みの暖簾を掛けることによりプライバシー確保にも繋がっている。	本人と相談しながら、ベッドなどの配置を変えたり、位牌や寝具、家族写真などを持ち込まれ、壁面等には、自作の手工芸品等が飾られ、居心地よく生活ができる環境作りに配慮している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	シルバーカーを使用されている入居者でも安全にホーム内を移動出来るよう、整理整頓等に心掛けている。又入居者個々に合わせて、ベッドの高さを工夫するなど安全に身体機能を生かした生活が送れるよう工夫している。		